

自転車トラック種目の男子ケイリンの脇本雄太(科学技術高出身、日本競輪選手会福井支部・プリヂストーン)は、当初は東京五輪の延期を受け入れられなかった。それから2カ月半。今は、発祥国として初の五輪「金」という悲願に向け全精力を傾けている。一度沈んだ心を再燃させたのは、ブノワ・ベトゥ短距離ヘッドコーチ(HC)が示した勝利へのビジョンと、亡き母が高校時代に掛けてくれた言葉だった。

ケイリン・脇本

初出場の2016年リオデジャネイロ五輪は「雰囲気は圧倒され」完敗。それからは本業の競輪の出走を抑え、ケイリンのトレーニングに専心。今年2〜3月の世界選手権で2位となり代表を確実にした後、五輪が延期に。「今の年齢で走りたかった。2年延期だったらやめていた」。31歳になったばかりの脇本は複雑な思いを口にした。

亡き母の言葉支えに

葛藤を抜け出すきっかけを与えたのはベトゥHC。「世界選手権で金メダルは取れなかった。その修正は半年ではできないが、1年なら間に合う」。リオ五輪後に就任し自らを世界トップレベルに引き上げたコーチの具体的プランを聞くうち、「強くなるための猶予ができた」と前を向く力を取り戻した。世界選手権で優勝したラブレイセン(オランダ)との差は「車輪1

個分」。その差を埋めるため、HCが課した課題は時速81キロのトップスピードをあと2キロアップすること。現在は、自宅でのためのフォーム改造に取り組む。「今は自分自身が敵。自粛明けにその成果を見せたい」と意気込んでいる。悩みが晴れない間、何度も脇本の脳裏をよぎった思い出がある。高校3年だった06年5月。部員が練習中の事故で亡くなり、全国高校総合体育大会(インターハイ)出場が不可能に。突然目標を失い、

そのまま自転車をやめるつもりでいた。

そんな時、母幸子さんから「我慢をすれば必ず良い結果が出る」と言われた。少しずつ練習を再開し、10月の国民体育大会10000以タイムトライアルで2連覇を達成。「二時の気持ちで諦めてはいけない。あの時頑張って本当に良かった」。目標が五輪となった今、改めてかみしめている。ケイリンは東京五輪までで、その後は競輪に専念すると決めている。11年になんて亡くなった幸子さんに約束した五輪金メダルを手中にするために悔いのない準備を続ける。(岩沢)



自転車トラック種目の世界選手権の男子ケイリンで銀メダルを獲得した脇本雄太。2月、ベルリン